

電子メディアを併用したピアノ弾き歌い教育の実践と評価

Practice and Evaluation of Playing and Singing Education Using Electronic Media

中平勝子, 赤羽美希, 深見友紀子

Katsuko T. Nakahira, Miki Akahane, Yukiko Fukami

長岡技術科学大学, 深見友紀子ミュージックラボ, 京都女子大学

Nagaoka University of Technology, Yukiko Fukami Music Labo, Kyoto Women's University

< あらまし > 保育者養成機関において, コアとなる実技科目の一つである弾き歌い指導については, 時間確保の観点から早急な授業改善 (Faculty Development) が望まれる。本稿では, その方策の一つとして, eラーニング教材を含む電子メディアを使用した指導法を導入し, 成果分析を行った。

< キーワード > 大学教育, マルチメディア, 授業実践, 自己学習力

1. はじめに

教員養成機関におけるピアノ実技, および弾き歌い指導に関する授業改善は, 通常対面による集合授業を通じた他者観察や自己学習記録による内省的学習が主流である中, 鈴木 (2005) による電子メディアを併用した, 学習者-教員間のコミュニケーションや模範演奏提示, 学習者のMIDI音源提出を活用したブレンデッドラーニングも導入されつつある。しかし, ピアノ弾き歌い指導にeラーニングを導入する場合, 指導すべき学習者の能力の中には表情や全身の動きといった, 視覚的に捉えなければ判らない事項も多く含まれており, この意味において映像の取り扱いが重要となる。本実践では, 学習者の活動ポートフォリオの一環として, 実技映像提出-eラーニングコンテンツ学習-映像再提出, というプロセスを系統的に組み込むことで, 学習活動における2者間の関係を分析した。

2. 実践環境

本実践は, K女子大学発達教育学部において実施される, 「児童音楽I」の授業に対して行われた。授業期間は平成20年4~7月, 履修者は98名であった。「児童音楽I」は, 大きく分けて1) 声楽, 2) コード進行, 3) ピアノ弾き歌い実技指導, を軸とし, 2コマ連続 (180分) で実施されている。学期の前半では, 声楽90

分, グループレッスン45分, 自習 (個人練習等) 45分で構成され, 後半では声楽60分, グループレッスン60分, コード進行 (座学) 60分で構成される。5月下旬, および7月中旬には, それぞれ中間・期末の弾き歌い実技試験を実施し, 学生の実技能力を採点している。本実践は, 3年前より横山他 (2004) によって提案された, F社製「KS20 (以下, 研修君)」を利用して実技試験の前後で自身の演奏風景の提出を促している (Nakahira et. al. (2007))。今年度は, それに加えて中平他 (2008) において開発したeラーニングコンテンツを組み込み, 次の様な授業の流れとした。1) 中間実技試験前に研修君を用いた自身の演奏風景の映像提出, 2) 中間実技試験後, eラーニングコンテンツ^{*1}を閲覧し, 演奏のポイントを学習, 3) 再度自身の演奏風景の映像提出。これらの実践を通して得られた結果の内, 1) 中間/期末実技試験の得点, 2) eラーニングコンテンツ閲覧に関するアンケート, の2つの観点から分析を行う。

3. 実技試験結果の分析

実技試験は, いづれも学生の方から演奏候補曲を3曲提示し, その中から1曲を抽選, もしくは教員が指定し, 学生は指定された曲を演奏する。その結果を教員2名が同席の上,

^{*1} <http://oberon.nagaokaut.ac.jp/kwu/piano/>

表1 中間・期末試験の得点差分布

得点差分布	頻度	得点差分布	頻度
≤-20	1	0	28
~-15	3	~5	35
~-10	5	~10	13
~-5	8	~15	2

表2 テスト曲の選定理由

選定理由	頻度	選定理由	頻度
曲が好きだから	40	弾きたい	3
弾きやすい	16	楽しい	2
知っている	8		

2名とも採点を行い、その平均をもって学生の得点とした。表1に中間/期末実技試験の得点差分布を示す。正值のものは、中間実技試験時より期末実技試験の方が高得点だったもの、負値は低得点であったことを示す。表より、正の値を持つものが全体の半数以上を占め、しかも5点以上の加点が認められたものが1割以上いたことから、相対的に期末実技試験時の方が実技能力が上がっているといえる。

4. 事後アンケート分析

次に、期末実技試験後に、事後アンケートを行い、eラーニングコンテンツや、研修君による映像提出について学生に質問した。事後アンケートには80名の学生が回答している。参考になった映像は、全体映像(65.0%、演奏姿勢のチェックに良い)、手元映像(53.8%、指づかひの確認ができた)、正面映像(22.5%)の順であった。研修君による映像提出を通じて、実技に対して上達したと感じた者は67.5%、感じなかった者は31.3%、研修君を利用してよかったと思う者は77.5%、わからない者は18.8%、悪かったと思う者は2.5%であった。研修君を利用した学生は、「提出前に自分の映像を確認して、姿勢の悪さに気づいた」「映像を取ると、自分の歌声がピアノに負けていて殆ど歌が聞こえていないことに気づいた」「映像を見て自分が思う以上に大きさに表情をつけないと伝わらないことに気づいた」など、映像取

得後自己チェックを行うことの効果感じており、このことと実技能力の向上が関連していると考えられる。また、表2に、学生が試験時に候補曲を選定する理由を示す。大きな傾向としては、「曲が好きだから」が半数を占め、必ずしもコンテンツを見たからという理由では候補曲とはしないことが判った。それにも関わらず演奏能力が上がったのは、映像提出やeラーニングコンテンツ閲覧という作業を通して、学生は自身の演奏技術を常に内省することで自身のレベルアップに繋がったからではないかと考えられる。

5. まとめ

本実践では、ピアノ弾き歌いの授業改善を、電子メディアを併用することで実現し、その効果を分析した。その結果、1)eラーニングコンテンツを見せることと、学習者の映像提出を並行して行うことで、学生の内省を促すことができる、2)ピアノ弾き歌いコンテンツ作りに有益なカメラアングルは全体映像と手元映像である、3)1曲に対して映像提出とeラーニングコンテンツによる自習を促すことで、実技試験で映像提出した曲以外を演奏した場合についても演奏技術がレベルアップすることがわかった。

参考文献

- 鈴木寛(2005),”ピアノ指導における「eラーニング」”,実技教育研究, Vol. 19, pp. 11-22.
- 横山淳一,松田信一,中平勝子,福村好美(2004) ”マルチメディアの取り扱いが容易な授業支援ツールの開発”. IPSJ SIG Technical Report, Vol. 2004, No. 117, pp. 61-66.
- Katsuko T. Nakahira, Miki Akahane, Yukiko Fukami(2007), ”Combining Music Practicing with the Submission of Self-made Videos for Pre-School Teacher Education”, Supporting Learning Flow Through Integrative Technologies, IOS Press, pp. 573-576.
- 中平勝子,赤羽美希,深見友紀子(2008),”ブレンデッドラーニングによるピアノ弾き歌い指導のためのeラーニングコンテンツの設計”, JSiSE Research Report, vol. 23, No. 1, pp.85-92.